

木曽川

特集・輪中のふる里・海津町

木曽川文庫は治水の資料館。

水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。

今回は輪中のふる里・海津町を特集。

輪中の形成や新田開発、現在進行形の事業をクローズアップします。

また、今回から4回に渡って、宝暦治水を追跡。

その歴史的意義、人物像などにスポットを当てていきます。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《海津町》

■変貌を遂げる輪中のふる里・海津町

AREA REPORT

■輪中地帯の治水事業

面白WATCHING

■ドラマティックなワンダーランド—KAIZU

歴史ドキュメント

■治水事業の先駆、宝暦治水

TALK & TALK

■平田鞠負の偉業を偲ぶ。

民話の小箱

■山の神

変貌を遂げる輪中のふる里・海津町

緑に映える養老山脈、多度の山々、滔々と流れる木曾、長良、揖斐の三大川。美しい自然が息づく海津町は、かつては海の底。逆巻く波と木曾三川の土砂が築き上げた輪中地帯です。暴れ狂う濁流、滞留する悪水と闘いながら、豊かな穀倉地帯として成長。水とみどりのユートピアを目指して、多彩な活動を展開しています。

築堤への歩み

岐阜県最南端に位置する海津町は、高須輪中の輪端部から輪中部に細長く連なるデルタ地帯です。東に木曾・長良の両川が、西に揖斐川が南流し、これらの川筋に囲まれた三角州が現在の高須輪中ですが、古くは木曾・長良川は東よりではなく、当地域を東西の二つに裂いて南流、その跡が現在の大江川として残っています。太古の時代、この地域は伊勢の海が波打つ海底にあり、長年に渡って木曾三川の流出土砂が洲を形成、平安初期には微高地で耕作が始められたと推定されています。

鎌倉中期には、高須の地名が初めて文献に登場。『大須宝生文庫』に高洲阿弥陀寺、高須寺などと記され、阿弥陀仏を本尊とする寺を中心に集落を形成。毎年のように、洪水の被害に遭いながらも、自然堤防を利用した部分堤防や



◀延享4年高須輪中図

岐阜県歴史資料館蔵

尻無し堤、潮除堤の築造と、その歴史は築堤の歩みでもあったのです。

天正十四年（一五八六）の大洪水は、現高須輪中の中央を流れていた河道を東よりに変え、ほぼ今日のような川筋となりました。慶長十一年（一六〇六）には旧木曾川筋に中堤を増築、古高須輪中が成立したと推定され、この時期に金廻輪中や秋江輪中も成立。これらの低湿地は次第に、田畑に開墾されました。

骨肉相食む幕末維新

大永二年（一五二二）、高須に初めて築城されて以来、高木十郎左衛門、徳永法印寿昌などが領主として入城、次いで寛永十七年（一六四〇）には、下総関宿より小笠原貞信が入城し、治水や開墾に努め、堤・樋の修築に力を注いできたが、慶長十四年（一六〇九）に完成した尾張藩の御囲堤によって、美濃側の洪水の災禍は深刻になり、水災による財政の破綻に苦悩した貞信は、遂に転封を願い出ました。その後、当地域は幕府直轄地となり、元禄十三

ふるさとの街・探訪記



年（一七〇〇）信州高取より、尾張藩二代光友の次男松平義行が入城、尾張藩の支藩として、十三代を経て明治に至りました。

歴代高須藩主のうち十代義建は、尾張藩主慶勝、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬など、幕末維新期にその名を馳せた名君たちの実父に当たりますが、尾張藩主慶勝は朝廷側に、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬は幕府側として、骨肉相争ったことは、まさに歴史の皮肉といえます。

水とみどりのユートピアを目指して

明治に入ると、浚渫や築堤の河川改修、ほ場整備、埋め立て事業が相次いで行なわれ、輪中の姿も変貌を遂げました。

昭和三十年、旧高須町、吉里村、東江村、大江村、西江村の五町村が合併して海津町が発足、同年今尾町の一部を編入して、現在の海津町の基礎ができあがりました。長良川・揖斐川の堤防の補強と共に内水面干拓、用・排水路及び農道等、各種の農業基盤の整備は着々と進む一方、陸上交通網の整備も進展し、昭和五十年代後半以降、油島大橋、立田大橋、長良川大橋などの木曾三川長大橋が相次いで開通し、かつて陸の孤島であった高須輪中は、豊かな穀倉地帯として飛躍を遂げています。

▲高須輪中排水機場

盤の整備は着々と進む一方、陸上交通網の整備も進展し、昭和五十年代後半以降、油島大橋、立田大橋、長良川大橋などの木曾三川長大橋が相次いで開通し、かつて陸の孤島であった高須輪中は、豊かな穀倉地帯として飛躍を遂げています。

海津町の淡水漁業

生まれ変わる輪中、海津町。水との闘いと共に歩んだ海津町は、過去の偉業を忘れることなく、未来へ顕彰。明治改修の父ヨハネス・デレーケの故郷、オランダとの交流を深め、宝暦治水ゆかりの鹿兒島県国分市との姉妹都市提携など多彩な活動を展開し、水とみどりのユートピアづくりを目指しています。

池・沼・排水路が多い高須輪中は、淡水魚の宝庫。農閑期を利用して漁業が行われ、この地の特産である鮒や鯉は、近畿地方まで出荷されていました。鯉・鮒には、とあみ、おしあみ、そこうげなどの漁具を、鯉には、うなぎかけ・つっぽこ・うげを、川海老には、太いうげを使用。鯉の活け造り、なまずのかば焼き、鮒や川海老の甘露煮などの郷土料理は絶品で、町内には川魚専門店や卸販売店もあり、川の珍味を求め、各地から多くの人が訪れています。

万寿騒動に揺れた高須輪中

天保六年（一八三五）四月三日夜八ツ時、伊尾川（現揖斐川）出水で高須輪中の南端、万寿新田の大江^い樋^い三門^いが抜け、五門の堤防が決壊、洪水は大江川筋を逆流し、石亀村にある中堤^い樋^いも破壊、高須輪中一円は濁流の渦に呑み込まれました。その原因は万寿新田の農民が苗代用水を引こうと樋口を開けておいたためとも言われていますが、真相は同年春、樋普請を行う際の不正のため、新樋の施工に手抜きがあり、逆水が入って破樋に及んだと考えられています。伝承によれば、この樋工事には、幕府領等松陣屋が関係し、樋御普請入用金として輪中民に金五百両を賦課して集めたが、二百両で万寿新田の水門普請をし、残金三百両を着服、不完全な工事であったため新しく施工した樋のみ、決壊したと言われています。

工事に不満を持つ被災民は、四月十四日朝、早鐘を打ち、ほら貝を吹きならし、六十一カ村の四千余名（二千人という一説もある）が徒党を組み、郡代を初め工事関係者の家に押し寄せ、家財を打ち壊しました。

郡代の懇請により、大垣藩及び高須藩から三百五十人が出動、二四日頃一揆はようやく鎮静。大垣本陣の白洲ではこの顛末をめぐって紛糾しましたが、最終的には「乱妨も輪中の者が心得違いをして、米が高値だから米屋を打ち壊したにすぎない」と裁可。江戸送りとなった首謀者十三名の内十二名は、取調べ中に獄死、『存命に候はば』という前提で、獄門・磔等の罪名が申し渡され、郡代は五十日の「押込め」に処せられましたが、一説には江戸へ下る途中、藤沢宿で自害したとも、病死したとも伝えられています。



▲釜（つえ・うげ）

▲底釜（つえ・うげ）

輪中地帯の治水事業

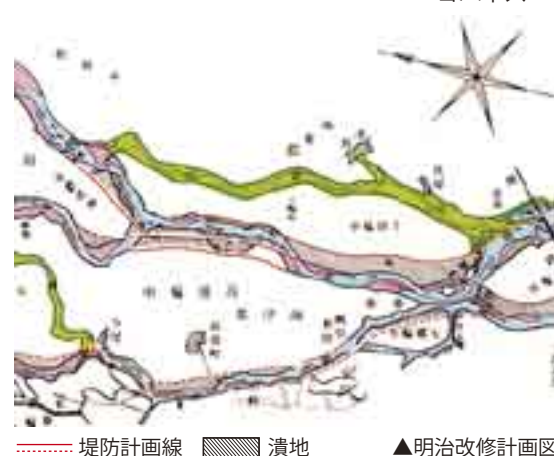
天の橋立を凌ぐ風光明媚な千本松原は、治水史を語る言葉なきモニュメント。怒濤の渦に向かった薩摩義士、三川分流を実現したヨハネス・デレーケ。過去の偉業を忘れることなく、未来へ未来へ引き継ぐため、素晴らしい自然との共生を第一に、様々な治水事業・修景計画が着々と進められています。



▲デレーケ三川改修計画図(複製)



ヨハネス・デレーケ



▲明治改修計画図

古来から木曾三川下流域ではたえず水害を蒙り、「五年に一度収穫があれば平作、三年に一度収穫があれば豊作」といわれる程、悲惨な状況下にありました。慶長十四年（一六〇九）には御囲堤が築造され、尾張国の洪水防御に効果を挙げましたが、美濃側は本格的な河川堤防の築造が許されず、洪水の度に大きな損害を受けました。その後、幕府は治水対策を立てましたが、一時的な復旧工事では解決せず、三川分流という根本的な治水計画を立て、延享四年（一七四五）、奥州二本松に御手伝普請を命じ工事を着工、宝暦三年（一七五三）から五年には、いわゆる宝暦治水の難事業を成し遂げましたが、本格的な三川分流の実現は明治まで待たなければなりませんでした。

江戸時代の治水事業

土地収用の努力

明治改修は三川分流を目的に実施されました。この改修は河道を修正し、三川の兩岸に連続堤を築造、三川の水流を区分するという事業。新川となる用地の取得とこれに伴う移転などの犠牲を引替えにしました。

改修のために収用する土地は、約二千九百ha、立退き家屋千八百戸余り。当初は大政官布達の公用土地買上規則により、土地は地券の額面で収用し、地価以内で愛知県及び三重県の木曾川に属する土地を取得。続いて立田輪中、高須輪中を収用する矢先、明治二年に土地収用法が公布され、時価をもって収用することとなったため、予算が不足。用地買上げに当たって、登記簿の売買価格及び収用区域内で売買されたものの実価の平均を標準するもの、と



▲三川分流碑



▲明治29年9月の大洪水（大垣城付近）



▲近代治水百年記念碑

の変更を余儀なくされました。奇しくもこの時期濃尾大震災が起こり、収用事務にも支障をきたすありさまで、収用する側とされる側に意志の疎通を欠き、地主の了承を得ることは容易ではありませんでした。これを苦慮した内務大臣は、土地収用法八条により土地収用委員会に裁決を求めましたが、これにより双方の衝突は極限に達し、出張中の技師が裏口から逃げたとか、捕えられ警察に保護された、という事件が伝えられています。

賛成派の土地は工事着手まで耕作を黙認

しながら、反対派の土地は一切立入りを禁じ、無断で植え付けをした者は、苗まで抜き取られたとか。しかし、明治二十九年に大洪水が起こり、移転を必要とする家屋の多くが流出。このため、倒壊家屋に対しても全部の移転料を払うなどの歩み寄りがあり、住民側も感情を融和した。かくして長良・揖斐川改修の土地収用は政府と住民両者の努力・協力によって明治二八〜三二年度で完了しています。

大江川水辺まちづくり基本構想

大江川は海津町のほぼ中央を南流する一級河川です。北部に隣接する平田町から流れ、東大江川と合流し、揖斐川に注いでいます。川岸には天然の水辺林やヨシ、オニバス、ヒシ等の水生植物が生い茂り、ギンフナ、ユリカモメなどが数多く棲息、豊かな自然が息づいています。この美しい自然を未来へ受け継ぐために、海津町では、「心萌える水と緑のふるさとづくり」をテーマに、大江川水辺まちづくり基本構想を検討。陸上からだけではなく、水辺からの見た魅力あるまちづくりを基本理念としています。

◆基本計画の概要

- ①海津町全体に調和のとれた区域の設定
- ②まだ整備されていない大江川の河岸に面した地域に、新たな河岸の計画を含めた拠点整備を行う。
- ③大江川沿いの拠点群をつなぎ、陸上交通と整合性の取れた水路のネットワークを展開する。

④百年、二百年を見据えた、新しく調和のとれた大江川の水辺を中心とした風景創造を行う。

以上の視点のもとに、公共水運（水上バス）の開発、港の開削、親水公園の造成など、幅広い分野に渡って構想がねられ、海津町は美しい水郷の町を目指しています。



▲大江川渡船場（海津町歴史民俗資料館）

大江川夕景

ドラマティックな ワンダーランド—KAIZU

朝の日ざしが川面を滑るように流れると、
自然も、魚も、鳥たちも、一斉に目を覚まします。
川とともに歩んできた町、海津町の横顔は、
ドラマティックなワンダーランド。
あふれる元気、あふれる躍動は、両手いっぱい
の幸せに変わります。

レジャーゾーン

1 国営木曽三川公園・中央水郷地区センター

木曽川、長良川、揖斐川が交わるリバーフロントに広がるコミュニティゾーンは、高さ65mの「展望タワー」が目印。「水と緑の館」では、木曽三川の歴史をジオラマ劇場、ビデオミュージアムで楽しく学べます。花と水、そして緑豊かな広場でリフレッシュもバッチリ。

2 海津町民プール・トレーニングルーム

屋外プールの50mウォータースライダーが大人気。その他、本格的屋内温水プール、子供・幼児用プール、トレーニングルームも揃って、ヘルシーライフを応援しています。

3 海津温泉・海津苑

身体を芯から暖めてくれる食塩泉は、リウマチや婦人病にもよく効きます。入苑料100円というのも魅力大。お湯はたっぷり、お肌はツルツル。ストレス解消も間違いなしです。

4 薩摩カイクウズ街道

岐阜・鹿児島県姉妹県協定を記念して、薩摩カイクウズ街道とネーミング。沿線には鹿児島の木・カイクウズが植樹され、初秋には濃紅色の花を咲かせます。また、サブステーションとしてポケットパークを設置。憩いの広場として多くの人々が集います。

カルチャーゾーン

1 治水神社・千本松原

宝暦治水の偉業を称え、平田朝負等を祭神としたこの神社は、昭和13年に創設されたもの。治水神社から、南へ約1kmにわたって続く松並

2 海津町歴史民俗資料館

江戸時代のお城を思わせる外観に近代的なインテリアの取り合わせがユニークな歴史民俗資料館。海津町の歴史や輪中に関する資料と展示物がギッシリ詰まった展示室で、あなたも海津町博士になれるかも!?

3 森下渡船

昭和40年代以前、愛知県や三重県と結ぶ交通機関と言えば、もっぱら渡船でした。陸上交通の発達により、そのほとんどが姿を消しましたが、今でも長良川と木曽川を結ぶ数分間、昔ながらの渡船の旅情を体験することができます。



▲国営木曽三川公園・中央水郷地区センター

海津町を彩る季節の祭り

■ 第二回全国選抜競漕大会

デレーケ記念レガッタ（長良川特設コース）

—10月11日—

木曽三川の治水の恩人、ヨハネス・デレーケの生誕150年を記念して、昨年開催された本格的なレガッタレースが、今年も引き続き国営木曽三川中央水郷地区、長良川特設コースで行われます。競技種目は、男女別ダブルスカルとシングルスカル、女子舵手無ペア及び舵手付フォアなど。デレーケが情熱を注いだゆかりの地で、その情熱に負けない熱い戦いが繰り広げられることでしょう。



●大会事務局 / 木曽三川公園管理センター内
デレーケ・レガッタ実行委員会

■ 治水神社秋季大祭(宝暦治水観音堂)

—10月25日—

昭和28年に建立された観音堂が老朽化したため、地元篤志家の寄進によりきらびやかな観音堂が昭和58年10月に再建されました。御堂には治水観音大菩薩像と薩摩義士位牌が祀られ、毎年10月25日には、岐阜県薩摩義士顕彰会の主催で仏式による慰霊祭を開催。義士の郷土鹿児島県からも多くの参拝客が訪れています。



●治水観音大菩薩像は海津町文化財の第一号に指定されています。

主・な・観・光・行・事

行 事	期 間
木曽三川公園正月イベント	12月31日～1月3日
チューリップ祭り	4月上旬～中旬
治水神社春季大祭	4月25日
長良川国際トライアスロン	8月中旬
長良川カーフェスティバル	8月下旬
木曽三川歩け歩け大会	10月上旬
治水神社秋季大祭	10月25日
日 曜 楽 市	毎週日曜日 (海津温泉)



▲森下渡船



▲海津町歴史民俗資料館



▲薩摩カイクウズ街道



▲治水神社



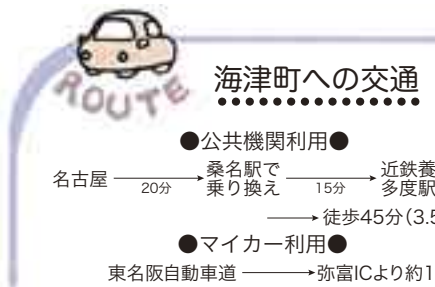
▲海津苑



▲海津温泉



▲海津町民プール・トレーニングルーム



治水事業の先駆、宝暦治水

ひとたび大雨が降れば、暴れ狂う河川、洪水に全てを失う人々。そんな窮状を打開するために、宝暦治水は行なわれた。遠く故国を離れ、見知らぬ土地で、鍬をふるった薩摩義士。油島の締切工事、大樽川おおくわがわの洗堰工事あらうせき。その難業を称え、今も称賛の声が止むことはありません。そこで今回から4回に渡って宝暦治水を特集、初回はその全貌を浮き彫りにします。

治水計画の起源

江戸初期になると新田開発が行われ、輪中の増加・拡大が進みました。その一方で水害が多発、これらは輪中地域の自然的要因に加え、新田開発と新たな輪中の形成、御開堤の築造といった社会的要因が重なり合って生じています。

この抜本的な解決策として三川分流に着眼したのが、紀州流治水の大家・井沢弥惣兵衛為永でした。為永は淀川木曾川、江戸川の治水に参画した、いわば近代土木の祖、享保二十年（一七三五）、美濃郡代に着任すると、在任わずか五カ月の間に川々

を巡視し三川分流計画を立て、幕府に建言、これが治水計画の起源であると言えます。

延享の御手伝普請後も水害や連年の凶作に苦しむ農民は、相次いで水行普請を嘆願したため、幕府は遂に抜本的な普請を決意、宝暦三年（一七五三）、九代将軍家重は島津家二四代重年に濃・勢・尾州川々御普請御手伝役を命じました。

薩摩義士による御手伝普請

江戸時代の治水制度は工費の負担別によって、公儀普請、御手伝普請、国役普請、自普請の四種に分けられています。水害の多発化と幕府財政の破綻に窮した18世紀初頭からは、公儀普請や国役普請で治水問題を解決することが難しく、御手伝普請が主流を占め、美濃国では延享の普請を初めとして十六回行われています。

宝暦治水はその中でも最大規模、幕府は大名の懐柔拘束

後の明治維新・倒幕の遠因をこの工事に求める学識者もいるほどです。

とはいえ九月二二日、第二期工事は各工区で一斉に始められました。この工事で最も難関であったのが、三之手大樽川洗堰工事と四之手油島新田締切堤工事でした。

大樽川の洗堰工事は、大樽川へ流入する長良川の水量を制限する目的のもの。長良川と大樽川との河床が2m前後の差があり、激流は滝のように大樽川に落ち込んでいたため、水害の発生を抑制しようと、洗堰を築造したのです。

油島新田締切堤工事は、木曾三川の合流地点（現海津町油島）から下流に至る約2kmの間に木曾川と揖斐川を分ける締切堤防を築こうとするもの。この地区は水勢の強い木曾川の水が、2m60cm前後も河床の低い揖斐川へ流下し、恒常的な被害に苦しめられていました。当初はその間を全部締切るか、中間を開けるかが決定されていました。宝暦五年老中堀田相模守の決定により、締切堤防の中間は舟便のために開けられました。

この油島締切工事は、わが国の河川工事ではこれの右に出るものがないと言われるほどの難事業でした。

近代治水工事の先駆

工事は二之手、一之手、三之手と逐次竣工、最大の難工事であった四之手も、宝暦五年（一七五五）三月二八日に竣工、五月二二日までに幕府の検分をすませ、無事に引渡しが行われました。

宝暦治水工事は三川の完全分流までに



▲薩摩義士の像

の策として、外様大名の筆頭である薩摩藩の勢力を削減し、幕府の安全を図るため、当時の治水事業最大の難工事を薩摩藩に命じたのでした。

しかし薩摩藩は、藩内及び大阪方に多額な惜財があり、その財政苦は想像を絶するほど。藩内では幕命を受けるか、抗戦するかで議論が別れましたが、勝手方家老平田朝負の決断で、難事業を受諾。総奉行平田朝負、副奉行大目付伊集院十蔵をはじめ九四七名にのぼる藩士を美濃に派遣して、工事に着手したのでした。

苦闘を極めた難工事

工事区域は、木曾三川の河口から50〜60kmに渡る流域で、美濃、尾張、伊勢を合わせた一九三カ村に及ぶもの。工区を一之手から四之手に区分し、御普請掛をはじめ多くの役人を配置、薩摩藩士は幕府による工事の設計、工法の指導監督のもと、工事を進めました。

工事は定式普請（修繕工事）と急破普請（復旧工事）からなる一期工事と、水行普

は至りませんでした。幕吏は最後の検分に、「御手伝普請結構に出来致して御座る」の声を惜しまず贈ったとか。連続堤を築き、洪水を河道内に閉じ込め、海に流し去るという計画は、明治以降の近代治水工事の先駆と評価されています。

宝暦治水の

あらまし

シリーズ

宝暦治水はわが国治水史上最大の難事業。宝暦三年（一七五三）十二月二五日、幕府は薩摩藩に御手伝普請を命じ、総奉行公平田朝負をはじめ九四七名の藩士により、翌年二月二七日、工事に着工。工事区域は木曾三川下流域ほぼ全域に及ぶもの。修繕工事、復旧工事と中心課題の木曾三川分流のため、逆川洗堰締切工事、大樽川洗堰工事、油島新田締切堤工事が実施された。同五年五月二二日に工事は竣工。木曾三川の完全分流には至らなかったが、明治以降の近代治水の先駆と評価されている。

◎第一編 VOL. 8

宝暦治水の概要

◎第二編 VOL. 9

工事の歴史的評価

◎第三編 VOL. 10

宝暦治水の功労者たち

◎第四編 VOL. 11

今に残される工事跡

▲宝暦治水跡と工区分



▼薩摩藩御手伝普請目論見図



▼大樽川洗堰絵図



▶鹿児島県立図書館蔵

第二期工事は、三之手の大樽川洗堰工事と四之手の油島新田締切堤工事などの難工事、上方表での惜入金、藩債募集、人別牛馬船舶税の加税など、薩摩藩は膨大な資金の調達に苦心を重ねます。工事にかかる総額は最終的には四十万両近くにも及びましたが、幕府は一万両を負担するのみ。



平田靱負の偉業を思ふ。

その不屈の魂と技量

土木技術が未熟な時代に、難工事を成し遂げた人がいる。
宝暦の英雄、平田靱負正輔がその人だ。
辛酸を極めた工事を竣工させ、
多くの犠牲者と多額な負債を一身に負い、
この世を去った孤高の人。
その崇高な魂は今も千本松原に息づいています。



平田靱負画像

歳で物頭となり、同二十年には父宗房の隠居に伴い家督を相続、寛延元年（一七四八）には家老職に任命されますが、その出世の道は、頭脳明晰な彼の才能が藩内で高く評価されたからでしょう。

宝暦三年幕府から治水命令が下ると、藩主重年は重臣を会した評議に及び、勝手方家老（財政主任家老）として手腕を発揮する靱負正輔を総奉行に任命。彼の苦渋の道は、ここから始まります。

資金調達に力量を発揮

宝暦四年正月、故国を出立した靱負は、先ず大阪の薩摩藩邸に到着、工事に要する資金の調達に奔走し、「此の節の御用銀さ

へ調達し得れば頂上の仕合ならば銀主等へ随分熟談し響應もせよ、進物もせよ。これも都合次第何ヶ度も繰返してやれ」と指示するほど。この金策がいかに困難苦心を窮めていたかを類推することができます。
やっとの思いで金七万両を調達した靱負一行は、閏二月九日美濃国大牧（現養老町）に到着し、第二期工事に備え、再度金策に奔走。米、砂糖、菜種などの物産の今後の収穫を担保に大阪方から多額の銀を借入します。しかしそれだけでは足らず、献納金の徴収や藩費節約令を公布し、約四十万両ともいわれる工事を調達したのでした。
当時の薩摩藩の年収は七十七万石であり、四十万両の借財は米に換算して、全収納米二年分を超過する額にも及び、薩摩藩として到底返済できない負債を抱え込んだといっても過言ではありません。

悲壮な最期

かくして一年有余、薩摩藩士が木曾・長良・揖斐三川の濁流と四つに組んで奮闘した御手伝普請は見事に竣工しました。

総奉行平田靱負は工事場の引渡しを終え、藩士の帰任を見送った五月二五日晚、大牧の本小屋で、五三名の割腹者と三三名の病死者の後を追うように、この世を去っています。

住みなれし里も今更名残りにて

立ちぞわづらふ美濃の大牧

故郷に想いを馳せながらも、苦悩の中でこの世を旅立った五二年の生涯。遺骸の傍にはこの辞世の句が残されていました。

平田家18代当主



平田 正風氏
●岐阜県高須輪中土地改良事業所整備第二課長

時代を語る生き証人

宝暦五年十一月薩摩藩から幕府勘定書へ差出した「御手伝普請御勘定帳」には平田靱負の死を病死と認めています。平田家系譜にも「持病により絶命」と記されていますが、当時の掟は「割腹はお家断に処す」と定めていたので、止むなく病死と記録されたと云われています。この病死説が自刃説と書き改められたのは、明治三十三年（一九〇〇）二月「宝暦治水碑」に自刃を明記してからのこと。今まで土地の人々により密かに口誦されてきた自刃が碑に刻み込まれて以来、郷土史家である伊藤信氏が「宝暦治水と薩摩藩士」に自刃と著し、世論を決定づけています。

平田靱負の偉業を顕彰する生き証人は、海津町で、土地改良に情熱を傾けています。その人物の名は平田



▲宝暦治水碑

は、土地改良に賭けた年輪がしっかりと刻み込まれているようです。宝暦治水からほぼ二世紀以上経た今も、その魂はこの地に息づいているのでしょうか。

土木技術が発達し、安全で潤いあふれた豊かさを享受しようとする現代社会でさえ、相次ぐ台風の影響により、厳しい現実遭遇しています。油島の千本松原は宝暦治水のモニュメント。川面に深い緑の影を映す松原は、自然の厳しさと素晴らしさを物言わず、語り継いでいるのでしょうか。



宝暦治水と薩摩義士

著者 伊藤 信
発行 株式会社 鶴書房

宝暦治水の克明な記録とも言える一冊。その苦難に満ちた全貌から、薩摩藩士の偉大なる功績を改めて感じることが出来ます。宝暦治水がいったいどのようなものであったのかを読み進めていくうち、その背景にあった当時の社会制度、人々の暮らしと人間模様、治水に関する技術力など、様々な要素が浮かび上がってくる名著です。

BOOK LAND

山の神

海津町・札野一色

むかし、むかしのお話です。そのころは、今のようにはっきりとした堤防ではなかったため、洪水の度に、海津町のいたるところで、何度も被害を受けました。

ある日のこと、いつものように大水がきました。その時、秋江・大和田のお宮さんから、石でできた立派なご神体が札野一色に流れつきました。村人たちは、

「これはもつたないことじゃ。このままにしておいてはばちが当たるぞ」と、もとのお宮さんに、おそろおそろお返ししました。それから数年たつて、また大水がありました。

水が引いてからよく見ると、なんと不思議なことに、以前お返ししたご神体が前と同じところに流されているではありませんか。村人たちはびっくりして、手を合わせながら、

「これは、本当に不思議なことじゃ。二回もここへ来なるといふことは、ここにまつられたいと願っておられるのじゃろ。皆の衆、どうじゃろ」と言つて、その場所にもつる相談をしました。

ところが、新しく神社をまつるには、お殿様の許可がいりました。そこで、村の中でも力のあった佐藤仙右衛門さんを総代にして、お殿様にお願いをしました。信心深いお殿様は、「よからう」と、木のお札をくださいました。(今でも佐藤さんの家にあります) 村人たちは、このお札を『山の神』と呼び、「どうか村が安全でありますように、家内が安全でありますように、作物がよく取れますように」という願いを込めて、おまつりするようになりました。

今でも、年の暮れになると、かがり火をたき、お神酒やお供えをして、「今年も豊作でありがとうございました。今年一年、村が無事に過ごさせていたいたいの。山の神様のお陰です。新しい年も、どうか良い年でありますように」と、感謝の気持ちでおまいりしています。

『山の神』は、今でも、村人たちの暮らしの中に生き続けています。



●木曽川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分
 《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
 《入館料》 無料
 《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島ICから車で約30分
 東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・
 木曽川文庫
 〒496 愛知県海部郡
 立田村福原
 TEL(0567)24-6233



編 集 後 記

夏休みには、多くの学生・生徒・児童の皆様にご利用いただきました。本誌と合わせてご利用いただければ幸いです。10月31日には、恒例となりました木曽・長良背割堤の自然観察会が行なわれます。vol.8編集にあたり、海津町役場の皆さまには、写真及び資料提供などの協力をいただき誠にありがとうございました。次回は藤橋村特集。そして宝暦治水をより深く探ります。お楽しみに。

●お詫び●

Vol.7「TALK&TALK」9P下段13行目の“明治四年”は、“明和四年”の誤りでした。筆者の伊藤安男先生はじめ、皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。

(表紙写真 左：千本松原
 右上：治水神社
 右下：野鳥)